

令和 5 年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国語

試験時間 50 分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全 15 ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄^{らん}に記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者^{かんとくしゃ}に知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を提出してください。
- 解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとします。

受験番号	氏 名

一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 授業で使用するため、タブレットを貸与する。
- ② 夏の暑さのため食べ物がすぐに傷む。
- ③ 学校生活を通じて、多くの知己に恵まれる。

問2 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① これらの行為は、断じてカンカすることができない。
- ② 資料をスクリーンにエイシャして説明する。
- ③ 植民地をブンカツ統治していく。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

本章のはじめのところで、雨に濡れたあじさいの美しさを人に伝えることがいかにむずかしいかということを言いました。わたしたちが見たり聞いたりしたものを言葉で表そうとして、うまくいかないという経験は多くの方がもっておられるのではないのでしょうか。

たとえばわたしたちは自分の気持ちを「はればれとした」とか「うきうきした」といったことばで言い表したり、お茶の味を「まろやかな」とか、「うまみがある」といったことばで表現したりします。しかしそのような表現で、自分の実際の感情や、お茶の味を十分に言い表すことができるのでしょうか。たとえば「まろやかな」という表現を、「味が穏やかで口あたりがよい、そして深い味わいが感じられる」といった言葉で説明することはできません。しかしその「深い味わい」がどのような味わいなのかをさらに説明しようとする、言葉に窮することになります。

言葉は、たしかに、わたしたちが経験するものの一面を言い表し、他の人に伝えます。しかしそれはわたしたちが実際に経験していることの一部でしかありません。言葉による表現は、経験の具体的な内容のある断面で切り、その一断面で経験全体を代表させることに喩えられるかもしれません。その一断面からあらためて経験の全体を眺めたとき、両者のあいだに大きな隔たりがあります。そのあいだには無限な距離があると一言してもよいでしょう。

「言葉」の語源は、「言の端」であつたと言われます。古くは「事」と「言」とは通じるものと考えられていました（言葉には、そのなかで言われているものを具体化する霊的な力が宿っているという、いわゆる言霊思想はそこから生まれたものでした。しかしやがて「事」と「言」とは同じではないということに人々は気づくようになりました。言葉は「事」言として事柄全体を言い表したのではなく、そのほんの一端を言い表したものにすぎないということが意識されるようになったのです。そのために「言の端」という言い方がされるようになったのだと考えられています。言葉がそのまま経験であるとは言えないのは、それがわたしたちの具体的な経験を X 概念によってひとくくりにしてしまうことに関わっています。先ほど、言葉は個々のものを類に分けていくという働きと深く結びついていると言いました。類に分けるといえるのは、それらを、その共通する特徴によってひとまとめにすることにほかなりませんが、それは個々のものがもっている違いを無視することでもあります。たとえば桔梗の青、露草の青、都忘れの青、それぞれの青は独特の色合いをもっていますが、言葉はその違いを無視して、それらすべてを同じ

「青」ということばで表現してしまいます。そのことによって、個々のものがもっていた微妙な差異は一挙に背後に退いてしまいます。

言葉は、それぞれ独自のニュアンスをもっていたものを、既成の枠組み、言わば鋳型のなかに押し込んでいくという役割を果たしていると言ってもよいかもしれません。わたしたちがそのときどきに抱く感情も、決して一つのことばで表現できるような単純なものではなく、さまざまな相がそ

こには絡まりあっています。また、固定したものではなく、大きな振幅をもちながら、止むことなく動いていきます。言葉はその動きの振幅を削りとつて、それをたとえば「悲しい」とか「寂しい」といった一つのことばで表現するわけですが、そのことによって感情のもっともいきいきとした部分がことばの影に隠れてしまうのではないのでしょうか。

言葉によってわたしたちは多くのことを知り、多くのことを考えるわけですが、そこには制約もまたあるように思います。枠組みのなかに入らないものはとらえることができないわけですし、その枠組みに取り込まれたものは、その枠組みにあうように変形させられてしまいます。これは、言葉にどこまでもつきまとう根本的な制約であると言ってよいでしょう。

それだけでなく、言葉は、この枠組みでとらえられたものが、もの自体であり、ものごとはそれによって正確にとらえられているという意識を、それを使う人のなかに生みだします。そういう意味で言葉自体がプラトンの言う洞窟の一つであると言えるかもしれません。しかし洞窟のなかに座って前方しか見ていないと、自分がそもそも洞窟のなかにいることにまったく気づかないということが起こるのです。

さて、言葉はこの具体的な経験とのあいだにある隔たりを乗り越えることができないのでしょうか。

言葉にはまず、先に述べたような、ものをグループ分けする働き、つまりカテゴリー化する働きがあります。ここでは、いま目の前にしているリンゴ、たとえば紅玉の独特の赤い色とか、それ特有の甘酸っぱい味、あるいはそれが私の好みであるとかいったことは問題にされません。むしろリンゴに共通の性質ですべてのものをひとくくりにすることがその場合の唯一の関心事です。

しかし、たとえば友人に「紅玉はおいしいよね」と語ったとき、この「紅玉」ということばは、その基礎的な意味を相手に伝えるだけでなく、相手がその味を知っている場合には、その人のなかに、紅玉特有の強い酸味のきいた甘さがありとイメージさせることができます。それを言葉の喚起機能と呼んでよいと思いますが、わたしたちは、「紅玉」ということばを聞いたとき、その音声越しに基礎的な意味を聞くだけでなく、さらにその意味を越えて、このことばがもつ豊かな意味あいをも聞くことができるのです。ここに鍵がありそうです。

たしかに、わたしたちはいくらことばを重ねても、紅玉の微妙な味をことばで表現し尽くすことはできません。そこに言葉の限界があります。しかし他方、いま言った機能によって、その味を直接相手のなかに喚起することができます。そのような働きがあるからこそ、わたしたちの会話は、平板な意味のやりとりに終始せず、いきいきとしたものになるのだと言えるのではないのでしょうか。

(藤田正勝『はじめての哲学』)

※窮する…行きづまってどうにもならなくなる。困りはてる。

※概念…理解している物事に共通している特徴。

※プラトン…古代ギリシアの哲学者。

※喚起…呼び起こすこと。

問1 ぼうせん部①「雨に濡れたあじさいの美しさを人に伝えることがいかにむずかしいか」とあるが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア「あじさい」の美しさを周囲の状況や花の具体的な状態まで、すべてを言葉では説明しきれないから。
 イ「あじさい」の美しさを一度も見ることがない人に説明するには、豊富な語彙力が求められるから。
 ウ「あじさい」の美しさの本質を捉えることが難しいため、それを言葉で他者に説明しきれないから。
 エ「あじさい」の美しさは見る人によって異なるため、自分の感じ方を相手に理解してもらえないから。

問2 ぼうせん部②「具体的」、④「共通」の対義語の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ②…相対的 ④…独特 イ ②…相対的 ④…特有
 ウ ②…抽象的 ④…固定 エ ②…抽象的 ④…固有

問3 空らん X に入ることばとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 客観的 イ 普遍的 ウ 論理的 エ 本質的

問4 ぼうせん部③「働き」、⑥「働き」とあるが、その説明としてふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア あるものもつまざまな要素の中から共通する特徴を見だし、その特徴を共有するものをカテゴリー化する働き。
 イ ある言葉をより大きな意味のまとまりにするために、その言葉がもともと持っている意味をあいまいにする働き。
 ウ 言葉のもつ一般的な意味を伝えながらも、その場にいる相手にだけ伝わる独自のニュアンスを生じさせる働き。
 エ それぞれの経験から、使うことができる言葉の種類が増えることで、イメージや目に見える世界を広げる働き。
 オ そのもの自体がもつ具体的な特徴を表現しなくても、それを知っている相手に関連するものをイメージさせる働き。

問5 ぼうせん部⑤「洞窟のなかに座って前方しか見ていない」とはどういうことか。説明しなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中高生が利用できる施設、サプリガーデン。「ぼく」はこの施設に通う中高一貫校の学生である。「ダイさん」はサプリガーデンで「ぼく」が出会った他校の中学生である。

それから期末考査までの一週間、ぼくはサプリガーデンには行かなかった。

今度こそ成績を上げなければ、終わる。^①

ぼくは塾も休んで、帰宅後はひたすら机に向かった。なのに、問題文が頭に入ってこない。何度も読みかえして、イライラした。

なんだよ、なんで一回で理解できないんだよつ。こんなことに時間を使ったら、テストで最後の問題までたどりつかないだろ！

おく歯をかみしめ、シャーペンで問題文にギツと線を引く。そのくり返しでほとんど成果を上げられないまま、ぐったりとベッドに倒れこむという日をくり返した。

そして、期末考査初日の朝。

いつものようにスマホで音楽を聴きながら地下鉄に乗っていると、ぎりぎりとお腹が痛みだした。あと十三分で学校の最寄り駅に着く。そこまですまん……とこらえるが、痛みはどんどん増していく。耳に響くせわしない曲に、^②気持ちとお腹がかき乱される。ついにこらえきれなくなつて音楽を止め、次の駅で電車を降りた。塾とサプリガーデンの最寄り駅だ。

ぼくは「くつ」と痛みをこらえながら改札階へ続く階段をのぼり、トイレの個室に入った。

それから緩急をつけて襲ってくる痛みと闘い、^③トイレからようやく出ることができたのは、三十分後だった。

これから行っても、学校に着くのは数学の試験のときになる。

ぼくはホームに戻ったものの、がっくりと、ベンチに腰をおろした。耳につけっぱなしにしていたワイヤレスイヤフォンをはずして、スマホとともにスクールバッグにしまう。ぼうつと前をながめ、やってきては去っていく電車^④を何本も見送った。

コースアウト――。

同じ言葉が頭の中をぐるぐるめぐる。

もういい。これ以上がんばれない……。

ぼくは立ちあがると、ふらふらと階段をのぼった。

サブリガーデンに行くと、スタッフスペースにいたゆつきーが立ちあがった。

「てらちゃん、どうしたの？」

ぼくはゆつきーの質問には答えず、受付に入館カードを出した。

「スタジオは空いてますか？」

「うん。誰も使っていないよ」

「Aスタ、使います」

ぼくはドラムスティックを借りると、誰もいないフリースペースを進んでスタジオに入った。スクールバッグをカーペットの床上ゆかに置いて、ドラムセットの前にすわる。ドラムやペダルの調整をして、スティックをふりあげた。

ダンッ！

じんと振動しんが体に伝わる。心こころにたまったどろりとしたものが、外おに押しだされるようだ。

ダンッ、ダンッ……

もうどうなつてもいい。がんばってなんになる。どうせ、ぼくはこの先もずっと底辺のままだ。

ダンドダ、ダンドダ……

がんばるのをやめたら、楽になんのかな。勉強から逃げて、どこまで逃げられるんだろう。

ダカダカダカダカ、ジャン！

手を止めて、ふーっと、肩かたで息をする。

うまくできないところをくり返して、音楽アプリを立ちあげようと、スクールバッグからスマホを取り出した。画面をタップすると、母から電話があつたという表示が出る。通信アプリにもメッセージがあると通知されるが、見る気になれなかつた。^⑤きっと学校から母に、ぼくが登校してないという連絡らくがいったんだろう。

母のかたい表情がうかぶ。

ぼくはスマホをスクールバッグの上に放りなげ、床にしゃがみこんだ。頭をぐしゃぐしゃとかきむしる。

どうしよう。どうしよう……。

胃がむかむかして、下腹がぎりぎり痛む。

ぼくは立ちあがって重いドアを開けると、フリースペースに飛びだした。受付の前を通って吹きぬけホールを横ぎり、エレベーターの脇にあるトイレにかけこむ。あまりの激痛におく歯をかみしめ、こぶしをにぎりしめた。

誰か、助けて！

どのぐらい個室にこもっていたかわからない。ようやく痛みがおさまってドアを開けると、手洗い場にダイさんが立っていた。制服ではなく、Tシャツと黒いパンツ姿だ。

「お、てらちゃん」

ぼくは「どうも」と小さく返事をして、ダイさんの横で手を洗った。

「てらちゃん、大丈夫か？ 顔色悪いぞ」

顔を上げると、鏡に映るダイさんと目が合った。心配そうに鏡の中のぼくを見つめる。ぼくはぼさぼさの髪で、顔色は青白く、目の下にはくまがあった。

「朝からお腹の調子が悪くて……」

力なく答えると、ダイさんはいたわるように言った。

「昼めし食ったか？」

「いえ……」

「少しはなんか食ったほうがいいぞ。おれ、これから昼めしを作るから、腹によさそうなものにするよ。フリースペースでちょっと待つてな」
そう言って、ダイさんは足早にトイレを出ていった。

ぼくはなにも考えられず、よろよろと音楽スタジオに戻った。ドラムのセッティングをもとに戻して荷物を持ち、誰もいないフリースペースに出る。受付にドラムスティックを返すと、ゆっきーが心配そうにぼくの顔をのぞきこんだ。

「大丈夫？」

「はい」とうなずいて、ふらふらとフリースペースの席にすわる。テーブルにつつぷすと、しばらくして、ダイさんの声がした。

「てらちゃん、具合はどうだ？」

顔を上げると、ダイさんがレジ袋レジ袋を持って立っていた。

「かきたまうどんを作るけど、食べられそうか？」

あたたかい声に、^⑥ぐつと胸むねがつまる。はい、と答えたいのに唇くちびるがふるえて声にならない。ぼくはこみあげるものをおさえることができず、手の甲こで目をこすった。

「おい、大丈夫かよ」

ぼくは鼻をすすりながら「はい」とうなづく。

人前で泣くなんて、かつこわるい。

ぼくはスタッフに見られないよう、後ろを向いた。

ダイさんがキッチンコーナーに行き、取ってきたティッシュボックスをぼくに差し出す。

ぼくはティッシュで目と鼻をふいて、息を整えた。

「もう大丈夫です。すみません」

「うん。とりあえず、うどんを作るよ。むりしなくていいから、食べたら食って」

ダイさんがスタスタと、キッチンコーナーへ行く。

(中略)

「いただきます」

ずるずるとすすって「うまい」と、うなづく。

ぼくも「いただきます」と、はしを持った。うどんをふーふー冷ましてから口に入れる。とろみのあるつゆと卵、それに刻みネギのからまつたう

どんが、あたたかいかたまりとなって、のどを落ちていった。

「おいしいです」

ぼくの言葉に、ダイさんはにと笑った。

「今日はテストで給食がなかったから、ここで焼きうどんを作ろうと思って材料を買ってきたんだ。さっき卵を買い足してかきたまにしてみたんだけど、うまくできたな」

「ぼくのために……すみません」

⑦ いたたまれない気持ちで頭を下げると、ダイさんは「なあに」と苦笑いした。

「あまった材料は夕めしにするから問題ねーよ。今日はちよつと肌寒いじゃん。かきたま、ぴったりだったな」

「夕食も作るんですか？」

ぼくが目をまるくすると、ダイさんはさらつと答えた。

「気が向いた時だけな」

ずるずるとうどんをすすって、また話す。

「おれも精神的にまいっていた時、ここでホットケーキを食べさせてもらったことがあってさ」

ぼくは、うどんを食べる手を止めた。ダイさんが遠い目をする。

「キーマさんが作ってくれたんだけど、あれでけっこう救われて、それでフェスの実行委員をやることにしたんだ。それからいろんな人と話すようになって、正解ってひとつじゃねえなってしまうようになった」

「正解はひとつじゃない……」

反復すると、ダイさんが「うん」と、うなずいた。

「サブリって、いろんな人がいるじゃん。中高生にもいろんなタイプのやつがいるし、ボランティアの大学生や社会人もいる。なんでもうまくやってそうなのやつでも、実は挫折した経験があったりして、みんな、手さぐりで生きてんだなって思った」

手さぐりで生きてる――。

⑧ 心のおくが、さわつと、ゆれる。

「おれはここでいろんなものをもらったから、次に渡していききたいと思ってさ。でも、てらちゃんには押しつけてたかもな。ごめん」

ぼくは「いえ」と首を横にふった。

「ぼくはほんと、かなりまいっていて、ダイさんに声をかけてもらわなければ、どうなっていたか……」

「おれが声をかけなくても、てらちゃんは立ちなおっていたと思うけど、ま、少しは役に立てたんなら、よかった」

ダイさんがにまっと笑って、うどんをすする。

ぼくもふつと息をついて、うどんをすすった。

食後、ぼくは学校に電話をかけた。試験は昼すぎまでだったから、終了したあとだ。

母には通信アプリでメッセージを送った。下痢りになってサブリガールで休んでいたけど、落ちついたから学校に行ってくる、と。そして誰もいなくなった教室で、ぼくはひとり試験を受けた。

帰宅後、キッチンにいた母に言った。

「今日の試験は受けたから」

母が不安げに言う。

「試験を遅おくれて受けると、減点になったりしないかな」

「それはないって、先生が言ってた。でも、実力からいって、今回も順位は上がらないと思う」
残念そうに「そう……」と、目をふせる母に、ぼくはイラツとした。

「そういう顔、やめてくんない？ 結果を背負うのはぼくなんだから、そういう顔をされるの、嫌いやなんだよ」
母がはつとして、小さく「ごめんね」と言う。

「心配してるのかもしれないけど、ぼくにはしんどい。このまま成績が上がらなかったらどうなるんだろうって、苦しくてたまらないんだ」
ぼくは母から顔をそむけると、風呂場ふろに向かった。脱衣所だういでイライラと服を脱ぐ。

そういう顔をするな、なんて、むちゃくちゃなことを言ってる。でも、どうしても嫌なんだ！
ザッと、頭からシャワーを浴びると、ダイさんの言葉を思いだした。

——手さぐりで生きている。

今のぼくのことだ。まっ暗で先が見えない。ぼくはどこへ向かったらいいんだよ……。

お風呂から上がると、母に「夕食できてるよ」と声をかけられた。ぼくが食卓たぐについて、ご飯を食べはじめると、母はお茶わんとはしを手にして静かに言った。

「学校に行くの、つらい？」

ぼくは少し間をあけて、首を横にふった。

「学校は……つらくない」

口にして初めて、そうだ、学校は嫌じゃないと思う。

「友だちはいいやつばかりだし、休み時間も楽しい」

母が少しほっとした顔になる。ぼくは豆腐とトマトのグラタンを口に入れてかんだ。考えながら、ゆっくり話す。

「自分でも今気づいたけど、学校の友だちといえるのは楽しい。ぼくは、あいつらと同じところにいたい。引け目を感じるんじゃない、対等でいたい。……だから、みんなから遅れるのがこわいんだ」

母がコトンとお茶わんをテーブルに置いた。

「成績が上がらないと、対等になれないの？」

「そ……」

「そうだよ、なれないよ、と言おうとして、口ごもる。」

対等になりたいとは思うけど、なにをもつて対等と言えるんだろう。ぼくの価値は、学校の成績だけで決まるのか？

ダイさんは、正解はひとつじゃない、と言っていた。

――机の上で勉強するだけじゃ、この先やっていけない。

――自分の幅^{はば}を広げておかなきゃ、つまる。

ケロちゃんが言ったのは、学校の成績がいいだけじゃ、やっていけないことがあるっていう意味だ。

「ぼくはこれまで勉強で勝負してきたから、成績が悪いと全部ダメだと思っちゃうんだよ。母もそういう感じのこと言ってたでしょ？」
母がきまり悪そうにうなずく。

「そうね。成績はいいほうがいい、と思ってた。でも、考えてみれば、学校の成績で能力のすべてが測れるわけじゃないのよね」

ぼくは、はっとした。

「そうだよ。成績って、どれだけ理解できたかを測る尺度なんだ。だったら、それだけで、ぼくの価値が決まるわけじゃない！」

「^⑨ぱあっと、光がさしたような気がした。」

成績を上げるためだけにやる勉強は、これ以上続けられそうになかった。でも、試験がただの尺度なら、そんなに重く考えることはないのかもしれない。

「母、ありがと。ちょっと気が楽になった」

ぼくは夕食を食べ終わると、音楽の試験勉強をした。

問1 ぼうせん部①「終わる」とあるが、どのようなことか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 何度問題を解いても理解できず、自分の力不足によって学校に通えなくなること。
- イ 何をやっても楽しいと感^{かん}じることがないまま、学校生活が終わるということ。
- ウ どう頑^{がん}張^がっても試験で良い結果が残せるとは思えず、未来に希望がないということ。
- エ 何をやっても無駄^だな時間^{じかん}だと感じたまま、自分の人生は終わってしまうということ。

問2 ぼうせん部②「気持ち」とあるが、この時の「ぼく」の気持ちの説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 試験を受けに行こうとしているのに、受けられない悔^{くや}しさ。
- イ これ以上の努力は出来ないことを親に理解されないもどかしさ。
- ウ 理解できない問題を解きに行かなければならない苦しさ。
- エ 学校に通えなくなることをこれ以上考えたくない辛^{つら}さ。

問3 ぼうせん部③「電車を何本も見送った」とあるが、この時の「ぼく」の心情を説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 時間通りに試験を受けることが出来ず、がく然としている気持ち。
- イ 試験を受けなければならない緊^{きん}張^がが解^ぬけて、気が抜けた気持ち。
- ウ これからは学校でも家でもない、別の場所を求めていこうとする気持ち。
- エ 試験を受けるという、当たり前のことが出来ない自分に嫌気がさす気持ち。

問 4 ぼうせん部④「心にたまったどろりとしたものが、外に押しだされるようだ」とあるが、「ぼく」にとってドラムを叩くことはどのようなものか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周りからのプレッシャーを跳ね返していくもの。

イ 行き場のない気持ちを発散させていくもの。

ウ 自分の中にある悩みや苦しみを消していくもの。

エ 向き合いたくないものから自分を逃がしていくもの。

問 5 ぼうせん部⑤「見る気になれなかった」とあるが、なぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 試験を受けなかった自分を心配する母に対して、言い訳したくなかったから。

イ 本当は母を喜ばせたいのに、そうなれない自分に怒りがこみあがってくるから。

ウ 登校しなかった自分に対して母が落胆しているだろうと思うと、気が重くなるから。

エ 母を悲しませることをしてしまったので、より具合が悪くなってしまうそうだから。

問 6 ぼうせん部⑥「ぐっと胸がつまる」とあるが、なぜか。その理由を説明しなさい。

問 7 ぼうせん部⑦「いたたまれない気持ち」は何に対するものか。誤っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ダイさんの存在によつていやされたこと。

イ ダイさんに気をつかせてしまったこと。

ウ ダイさんの予定を変えてしまったこと。

エ ダイさんが「ぼく」のために動いたこと。

問 8 ぼうせん部⑧「心のおくが、さわつと、ゆれる」とあるが、どのような気持ちか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の知らないところで苦勞をしていた人の辛さを知って、胸が痛んでいる気持ち。

イ 表面的にしかサプリに集まる人を見ていなかったことが分かって、反省している気持ち。

ウ サプリにいる人たちの様々なあり方を知る中で、自分の生き方への不安が消えていくような気持ち。

エ サプリに集まっている人たちの背景を優しく語るダイさんに対して、胸が温かくなる気持ち。

問 9 ぼうせん部⑨「光がさしたような気がした」とあるが、どのような気持ちか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今までの悩みが消え、自分にも人に影響を与える何かが出来るのではないかと期待する気持ち。

イ 自分を苦しめていた勉強をやめることで、ありのままの自分を受け止めようとする気持ち。

ウ 自分をより成長させる考え方にふれ、前向きに学校生活を送ろうとする気持ち。

エ これまでの自分を悩ませていたものの正体分かり、解放されていく気持ち。

四

次の各問いに答えなさい。

問1

①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① 下手の□好き

ア 手間

イ 横

ウ 暇ひま

エ 意味

② 待てば□の日和あり

ア 回路

イ 海路

ウ 回廊えうらう

エ 開路

問2

次の空らんにあてはまる言葉を後から選び、記号で答えなさい。

① () な表情を浮かべている。

ア ぞんざい

イ せっかち

ウ ずぼら

エ うつろ

② 今回の製品は世にもめずらしい()なものだ。

ア 画一的

イ 高圧的

ウ 初歩的

エ 画期的

問3

次の文のぼうせん部のうち、意味が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今日は久しぶりに熱帯夜になりそうだ。

イ この白いパンはとてもやわらかそうだ。

ウ 休憩から戻ってきた彼女は元氣そうだ。

エ 午後の練習は体育館でおこなうそうだ。

以下余白

